

妖怪伝承を活用した防災教育プログラム ～みえないものへのまなざし～

自然・環境マネジメント研究部 環境計画研究グループ

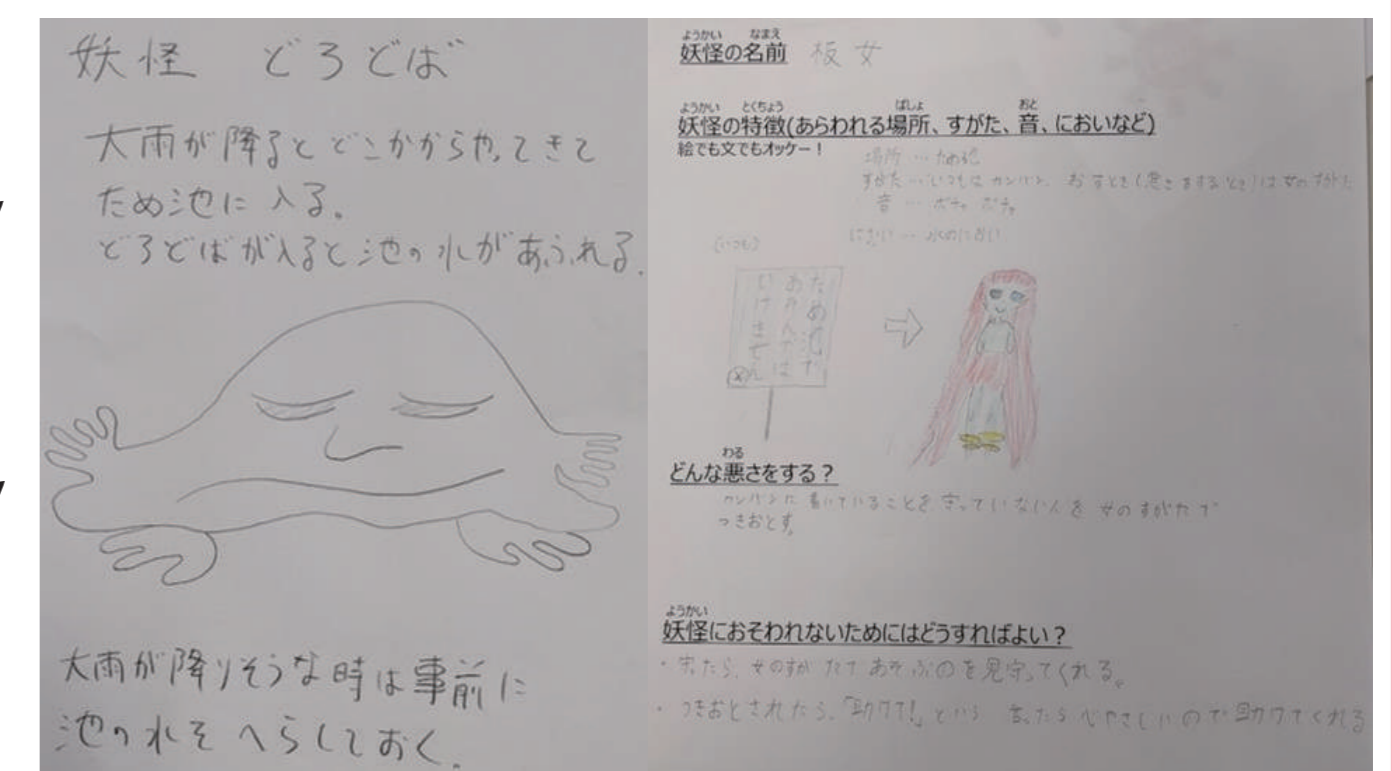
高田 知紀



日本の各地には、実に多くの妖怪が語り継がれています。人びとは、身の回りで起きる不可解なこと、好ましくないことの発生要因を「妖怪」のしわざと捉え、自らを納得させてきました。妖怪伝承のなかには、地震や津波、洪水、土砂崩れなどの自然災害に関連する内容が多くみられます。自然環境から豊かな恵みを楽しむことと同時に、多様な災害リスクをどのように回避していくかが、人びとにとっての大きな関心事だからです。

自然災害に関する妖怪としては、木曾川流域に伝わる「やろか水」があげられます。川の上流から「やろか、やろか」という不気味な声が聞こえて、「よこさばよこせ」と返すと、鉄砲水で流されてしまうという話です。兵庫県内にも養父市八鹿に「岩崎の大蛇」の伝承があります。ある大雨の日に、ため池に住む大蛇が池を出て、集落や田畑を荒らしたと伝わっています。他にも全国に、地震を起こす大鯰、津波を呼ぶ人魚などの妖怪譚があります。

自然災害に関する妖怪伝承をもとに、新たな防災教育プログラムとして「妖怪あんぜんワークショップ」を考案し、各地で展開してきました。地域を歩き、災害が発生しそうな場所を探します。次に、危険な場所に現れるオリジナルの妖怪を考えます。妖怪の特徴だけでなく、襲われないための方法を考えることで、身の回りに隠れている様々なリスクを洗い出し、共有し、対策を検討します。妖怪も災害リスクも普段は目にみえていません。安全な暮らしに向けて大切なのは、平常時からいかにそれらを「気にかけて」おくかということです。妖怪は、みえないリスクを教えてくれる存在でもあるのです。



ワークショップ参加者が考えた妖怪の例。
「どろどば」は、大雨の時にため池の水を溢れさせる。
「板女」は、ため池に近づくと引きずり込んで溺れさせる。